

「ブーブ」に描いた

Nのこころの世界

吉川はる奈

子どもの絵は「子どものこころのメッセージである」といわれるが、いつも子どもの傍にいる大人もそのメッセージの中身になかなか気づくことができない。言葉という表現手段にあまりにも頼りすぎているからだろうか。

一歳十ヶ月を迎えたある日の夕方、Nはおやつを食べ終え椅子をおりた。いつものようにつぎつぎおもちyaを取り出して遊ぶのかと思ひ私はNから目を離し夕食の支度にとりか

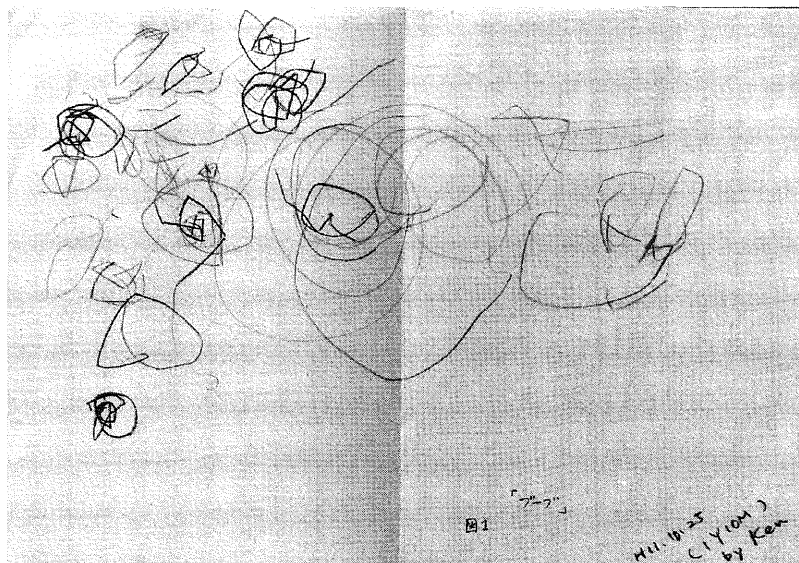


かった。

夕食の支度をしながらふと、「Nはどうしているのだろう」と思った。いつもならおもちゃをとりだしながらあれやこれやと母親である私を呼ぶ。私にまとわりつきながら遊ぶので、合間をぬって夕食の支度をするのだが、また呼び戻されてしまいいつしよにNと遊ぶという繰り返し日が日常である。ところが、その日に限って私を呼ぶ声が聞こえない。しかも随分と静かだ。兄もいつしよに部屋にいるはずだが気になる。

気になって、部屋をのぞい

▼図1





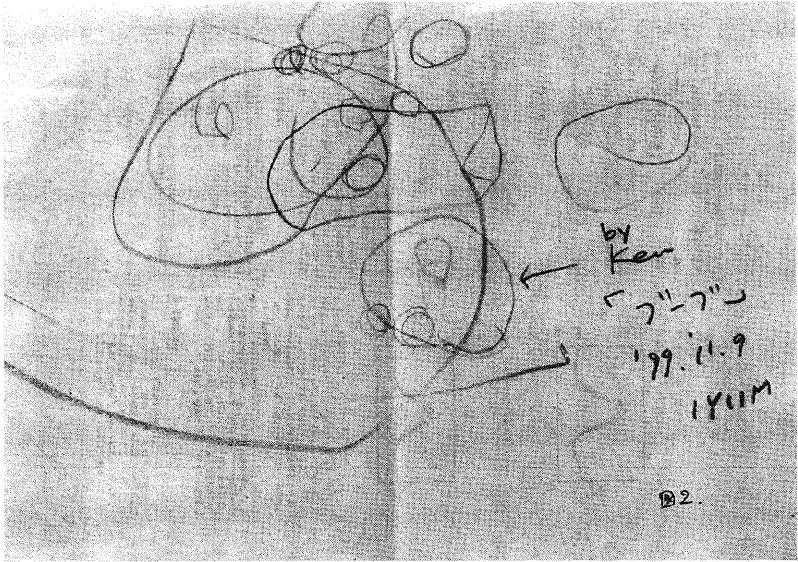
た。

Nは下を向いて一心に紙に色鉛筆を走らせていた。

かなり集中していたので私は驚いて、一瞬声をかけるのをためらった。少しNの様子をみていた。赤と青とピンクと黄色そして黒とさまざまな色でいびつな丸をたくさん重ねて描いている。「Nちゃん」と声をかけた。するとNは顔をあげてうれしそうに「ブーブ」と答えた。「本当だ、ブーブがいっぱい」と思わず私もそれに答えた。するとまたNは下を向き同じようにいびつな丸を次々と重ねる絵を描きつづけた。一時間ぐらい続けていただろうか。同じ姿勢で繰り返し「ブーブ」といいながら描きつづけた。そして次の日も次の日も家にいる時間はN自らテーブルの前に座り色鉛筆を使い「ブーブ」を描いた。(図1)

当時、Nは言葉として表現できるのは「ママ」「パパ」「ブーブ」くらいでいわゆる「言葉の早い子」ではなかった。大人からの言葉は理解しているようだったが自分でなかなか言葉を発せられずもどかしい様子もみられた。そんなNが「ブーブ」といいながら絵を描きつづけたのである。

二週間がすぎた。同じように「ブーブ」といいながら描きつづける絵をみると大きな丸の中に小さな丸が一つそして大きな丸の線に沿って小さな丸が二つ(図2)。ずいぶん変化していた。「ずいぶん車らしくなった」などと私は貧しい想像力を働かせたりした。N



▲図2

は同じように「ブーブ」とい
いながらさまざまな色で描き
つづけていった。

母親である私から見ると絵
を描きつづけるNのこの姿は
これまでの思うが侘に関心を
移しながら遊ぶNの姿と大き
く異なり、戸惑いを感じてい
た。「こんなに全神経を集中
させてどうしたんだろう」と
さえ思った。「ブーブ」とい
いながらひたする描きつづけ
るNのこのところの中をのぞいて
みたいなどという思いにもか
られていた。「そうブーブ
ね。Nちゃん乗ってるね」な
どと答えながらもどかしさ

を感じていた。そして「これだけいくつも『ブーブ』を描きつづけてNはやっぱり車が好きなんだ」などとぼんやり考えたりしていた。

Nの「ブーブ」描きは一ヶ月ほど続いていた。家で過ごす時間のうち食事や睡眠など必要最低限の生活事項を除いたNの全ての時間を費やして描いていた。

そしてNが一歳十一ヶ月になったある日、私のもどかしさは解けた。「ブーブ」といいながらいつものように大きな丸の中に一つ、線に沿って二つ小さな丸を描き、描き終えたその形をNは再度「ママ」と表現した。

「そう、ママのブーブなのね」と私は即座に答えていた。同じ「ブーブ」を描きつづけているように見えるが、Nの心の中では「ブーブ」がさまざまに意味付けられ表現されていいたのではないか。考えてみれば「ママの（運転する）ブーブ」でNはいつも買い物に行ったり、保育園にも行く。同じように見えるNの描く「ブーブ」が、ママの運転する車であったり、パパの運転する車であったり、よく見かけるバスであったり、保育園に行く途中で通る消防署の消防車や救急車だったのである。

私は言葉でがんじがらめになっている自分を恥じた。一枚の紙の上に、Nは「ブーブ」を通して自分のところをメッセージとして表現していたのだろう。言葉で表現されないが





ために私が読み取れなかったのだろう。

言葉として「ママ」と「ブーブ」「パパ」しかもたないNの最大限のメッセージが一つ一つの「ブーブ」の絵の中にこめられていたのだろうか。

「ブーブ」描きの終わりは本当に突然やってきた。二歳の誕生日の直前だった。あんなに夢中になって全神経を注いでいたはずの「ブーブ」描きを二歳四ヶ月になる現在もしていない。

そのかわり、本を見ては、テレビを見ては大通りを見ては、「ブルトーザー!」「キャンピングカー!」「消防車!」「バス!」「トラック!」と叫んでいる。どうやら言葉で表現することに夢中のようにある。

(お茶の水女子大学)